古い池

小林まもる

水面を自在に動き回っていた
水すましはどこへ行ったのだろう
少年の高慢や恥辱など
とっくに澄んでしまっている

池に沈むしがらみは
百舌やヒキガエルのように
とび越えねばならぬものだった

見知らぬ男に突き落とされたり
渦巻に引きずり込まれる
そんな恐れを背後にしていた
少年の日々

　這い上がりたかった

あれから幾世代が過ぎたのだろう
オンボロロになってたどり着き
とび越えてきた後ろめたさに
また古びてはにごる歳月

　それでも許されている

行方不明の人の名や
ずぶぬれの時や絆が溶けている池
縄文の土器を焼く先祖の村や
いくさで子を失った
母の狂気をしずめた池

ちょっと少し前だったろう
孫と覗いていたその二つの顔も
シャボン玉や雲や雪の結晶も
池の鏡は映している